
転世 ~ vampire's avenger ~

天塚 優陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転世のvampires avenger

【Nコード】

N5872Y

【作者名】

天塚 優陽

【あらすじ】

”魔力が発現しなかった”それだけで捨てられた少女。”神様をお願い”それを聞き入れ吸血鬼になった少年。少年は、少女の願いを聞き国家と敵対することを決めた。

異世界転生物×復讐物。……になるつもり。

注意 この小説には、性転換・主人公最強・ご都合主義・若干のグロテスクが含まれています。苦手な方はご注意を。

プロローグ

「これで第一学期終業式を終わります。……解散」

壇上に立つ校長のその言葉で、さつきまで静かだった周囲が一気にうるさくなった。

ほとんどの人は明日からの夏休みの予定を話している。

そんな中、僕は特に誰と話すでもなく、学校の敷地外へ歩いていった。

別に友達が居ない訳では無い。基本的に思いつきで行動するので予定を立てるのは性に合わないだけだ。

駅前の本屋で電車が来るまで時間を潰し、しばらくしてホームにゆっくりと滑り込んでくる電車を待つ。

時間は正午。二両編成の電車に乗る。時間が正午ということもあって、乗っている人は少ない。僕を入れて4、5人といったところだ。

僕だけだったら窓を開けたのに……

この路線は海沿いを走っているので窓を開けると結構気持ちいい。だからといって、ほかに人が居るのに窓を開けるなんてことはないけど。

結局、何もしないまま目的の駅に着いた。目的といっても自宅からの最寄り駅で今から帰るだけ。

少し錆付いている立体駐輪場から自分の自転車を引っ張ってくる
と、家に向かって漕ぎ始める。

普段は、駅周辺の本屋を回ったりするのだけれど、今日は久しぶ
りに真っ直ぐ家に帰る進路を取った。

”このとき普段通りにしていたら……”

ふと、そんな言葉が聞こえた気がした。

ブログ（後書き）

今回はテスト投稿の意味も含んでいます。

投稿した以上完結させたいとは思いますが、完結はいつになるやら……。

できれば2週間に1話ぐらいのペースで投稿できればいいなと思います。

第一話 人間から吸血鬼へ

「うう……」

目が覚めると、そこは真っ白な空間だった。

病院の一室からすべての備品を取り除いたような、何も無い真っ白な四角い空間。

その中に、僕ともう一人。見知らぬ少年　もしくは少女と呼べるほど中性的な身体をしている　が居た。

「ふふっ、残念。おしかつたね、僕は”中性的な”ではなくて”中性”だ。僕は男でも女でもないよ」

無邪気に笑いながら僕のほうに近づいてくる。

その足取りは、遠足前の小学生のように浮き立っていて、それが何処か滑稽で噴き出してしまった。

「では、自己紹介をしようか。僕はアリス、一応君たちが言うところの”神”と呼ばれる存在だ。よろしくね？栗原珪一くん」

そういつて右手を差し出してきた。

「ん。よろしく」

それだけ言って、僕はその手を握り返した。

握り返したては驚くほど冷たく、人の温もりなど欠片も無い。む

しろ、「生きているのか？」と小一時間ほど問い詰めた。

「まあそれでも、生き物じゃないことぐらいは分かるけどね。……
何故か知らないけど」

ストレートに、目の前の”もの”は生き物ではないと言い切った。

「いやあ、ご名答。君は面白いね、ここに来てまだ君たちの時間で5分ぐらいだけど、これほどの早さでこの知識を手に入れたのは君が初めてだ。

さすが”世界を変える”ほどの運命の器を持っていただけのこと
はある」

「運命の器？」

「そうか、いくら早いといってもまだ全部は入ってないんだね。

どこまで入っているか分からないからとりあえず少し説明させて
もらうよ。

まず、運命の器について。これはすべての生物にあるもので、その生物が一生にどれだけ世界に影響を与えるかの1つの目安みたいなものだね。大きければ大きいだけ世界に与える影響は大きくなる。……もっとも君みたいに何もしいまま死んでいくこともあるけれど」

アリスは、そこで一度話を切りこちらの様子を伺うように僕のほうを見る。

「えっと……どうしたの？」

「いや、普通死んだなんて聞かされたらパニックになると思ったんだけど、予想以上に君は落ち着いてると思って」

「それは……自分が死んだっていう自覚があるから……」

そう、自分が死んだ自覚はある。自分の些細なミスでトラックに轢かれたことは覚えている。

あれから、すぐに意識はなくなったが、大型トラックの下敷きになって生きていられるほど頑丈な体じゃない。

「へえ……覚えてるんだ。本来はショックで記憶が欠落したりするんだけど。」

……話が逸れたね。

説明は……そうそう、運命の器の話だったね。

君みたいな大きな器の持ち主が、何もしないまま一生を終えた場合は自動的にこの空間 正確には空白世界と言っただけれどへ送られてくるようになってるんだ。

2度目の人生を歩むためにね」

相変わらず無邪気に笑いながら僕のほうに顔を近づけてくる。

「どう？元の地球へはできないけれど、転世………してみる？君の器なら特典もある程度つけられるけど」

「もし転世を望まなかったら……？」

「そのときは君はここで消える。器だけを残してね」

それなら、選択肢は1つしかない。さすがに何もしいまま消えるのは面白くない。

僕は、転世を受けることにした。

「君は迷わないね。って言ってもこの状況なら迷う余地も無いか…」

さて、まずは転世先の世界について話さないといけないね」

そういつて、アリスは世界の説明を始めた。

普通説明のほう先にするものだと思っただけけれど口には出さなかった。

「まあ、こんなところかな？」

……自分の時間感覚で大体20分ほど説明していたアリス。

ずいぶんと長々と説明していたけれど、簡潔に言えば剣と魔法のファンタジーな世界らしい。

というか、そうやって一言で言ってくれたほうが分かりやすかった。

「ここまでで何か質問とかある？」

「普通の剣と魔法のファンタジーの解釈でいいなら特に」

「そう。じゃあ今から特典の話をするけど……その前に1つだけ頼まれてくれないかな？一応今回の転世の条件としてつけるつもりだったんだけど……」

「その条件によるけど……相当変なものじゃなければ」

そう返事した途端、アリスは無邪気な笑みををより一層輝かせながら嬉しそうに喋り始めた。

「そう、よかった！じゃあ君の転世後の種族は《吸血鬼》で決定！

どこからかメモ帳を出現させ、その中へ書き込み再びこちらへ向き直ると

「じゃあ君の欲しい特典を言ってみてよ。あ、身体能力はもう無理だから。既に、身体能力だけは人類限界を超えてるから。

それと魔力量方面も心配しなくてもいいと思うよ。魔力量の基本量は器の大きさに決まってるからね」

何でも無いように、そんなことを言った。

………そこまでされたらもう頼めるようなものは無い気がするんだけど。

ん、まだあった。

「とりあえず、現地の言語を使えるように。あと出来れば学園生？レベルの知識も」

「それだけ？もっと創造したものを具現化とか言つと思つたのに」

「うん。それだけで十分かな？……あ、属性の指定って出来る？闇

と氷を使ってみたいんだけど」

「大丈夫、それくらいなら簡単だよ。でも、向こうに行ったときに新しく属性が増えるかもしれないけど。……本当にそれだけでいい？」

「うん、別に僕は楽しめればいいから……」

「そう……じゃあそろそろ行って貰おうかな。」

トンツ

唐突に後ろから押されたと思うと、既に体は目の前に突然開いた穴に落下を始めていた。

それと同時に、激痛が僕の全身を襲った。かろうじて動かせる頭だけを上に向けると、この二つの出来事の元凶であろうアリスが穴の淵から顔をのぞかせ笑顔で手を振っている見えた。

「最後に1つ忠告。君の器にまだまだ余裕がある。1つ勝手に能力を追加したけどそれでも余りあるほどに。君は良くも悪くも世界を変えられる存在だって事を忘れないでね」

その言葉を最後に僕は意識を失った。

「ふう……。何とかうまくいったかな？彼と彼女には悪いことしちゃったけど……」。

けど予想以上に親和性がよかったから安心っちゃ安心かな」

その場には、穴をのぞきながら呟くアリスと、珪一の身体だけが

残っていた。

第二話 異世界エルクード

少女は森の中を彷徨っていた。

前後左右、どこを見ても鬱蒼とした木々に覆われていて日光も少なく、視界が悪い中をただ一人外を目指して 実際、外へ向かっているかは疑問だが ただ歩いていた。

「
」

既に二度、少女はこの森で夜を明かしており、元はかなり上等な品だったと思われる服も、ボロ布同然に破れ、まともに声を出せないほど体は憔悴し切っていた。

ふと、少女はほぼ無意識のうちに動かしていた足を止める。

少女の視線の先、前方約20メートルの位置には巨大な狼の群れが居た。

2・5〜3・5メートルほどの暗いグレーの体毛を持つ危険度Aランクに分類される『ジャイアントウルフ』が8頭、そして、その群れを率いていると思われるウルフ系統の最上位、危険度Sランクの『シルバーウルフ』が2頭。

間違っても、普通の人間が敵う相手ではない。

少女はこの時点で生き延びることを諦めた。

始めから分かっていたことだった。特級危険指定区域”エイワズの森” 通称、死の森 に捨てられて、生き延びることは不可能だと分かっていた。

パキッ と足下で枯れ木の折れる音が響いた。

ウルフたちが一斉にこちらを向く。

そして、シルバーウルフの咆哮。それが合図になったように一斉に少女へ向かって飛び掛った。

少女は、為す術も無くウルフたちに右手、左足を食い千切られ

「……っ」

悲鳴を上げる事すら叶わず、少女の意識は無くなった。

少女が意識を失った数瞬後、栗原珪一は目を覚ました。

目を開いて最初に見たものは、自身の身体に群がる狼の群れ。そして、自身の身体に右手と左足が無いことに気がついた。

既にその段階で意識が飛びそうになるが、意識が飛ぶことは無かった。

「 ツ！」

言葉に出来ないような激痛。それと同時に周囲に魔力の渦が発生し、群れていた狼を一瞬でただの肉塊にして吹き飛ばした。

激痛は20秒ほどの短い間で治まり、魔力の渦も消えた。

その中心には、先ほどまでの満身創痍の体ではなく、どこにも怪我ひとつ無い12歳ほどの”少女”が立っていた。

激痛が治まり、何故か再生した手足のおかげでようやく立ち上がることに出来た僕は自分の視界に違和感を覚えた。

地面が近い。

次いで、自身の体を見る。

男のものとは思えないほど小さく柔らかい手。肩甲骨の辺りまで伸びた艶やかな漆黒の髪。

決定的に違うのは、服の上からでも（かろうじて）分かるぐらいの大きさのある二つの膨らみだろう。

……

数秒、思考が停止した後

僕は、およそ男子が出すようなものではない悲鳴上げた。

流石に、少女の身体になるのは予想外だった。

「まあ……いいか。風呂とかは大変そうだけど」

少し声に出してみたが、特に意味は無い。強いて言うなら、目の前に巨狼が居るといふ現実から意識を逸らしたかった。

……現実逃避はやめて、真面目にこの状況を何とかしないと。

目の前には白銀の巨狼が二頭。こちらは戦えるようなものは何も持っていない。

頼りになりそうなのはこの世界にある魔法。……なのだが、それも扱い方を知らなければ力にはならない。

と、そこまで思考を巡らせたとき、先ほどまで威嚇の姿勢しかとってこなかった二頭が攻撃の姿勢に入った。恐らく、背を向けた瞬間に体の一部が無くなるだろう。

……これで、逃げるという選択肢が無くなった。

残るのは、吸血鬼になったことで強化されたであろう生身の身体能力のみ。

人間の限界以上とは言っていたが、どのくらい上がったかはまだ分かっていない。……といっても、もう既にそれに頼らざるを得ないような状況になっているのだが。

試しに横にあった木を全力で殴ってみる。

バキツ　と盛大な音こそ無かったものの、殴られた部分がきれいに抉られていた。

これならきつと大丈夫だろうと思ひ、狼のほうへ近づいていく。

残り10メートルほどの距離に来たとき、ついに狼は威嚇を止めこちらに向かってきた。

そして、それを認識すると同時に僕は勢いよく前に一步踏み出した。

狙うのは、相手の勢いも利用したカウンター。向かってくる狼にタイミングを合わせて（神が言うには）人間の限界を超えた身体能力で拳を振りぬいた。

振り抜いた拳は寸違わず狼の鼻頭に当たり、頭蓋が割れたような音が響いた瞬間 盛大に頭蓋の中身を撒き散らしながら狼の頭部が弾け飛んだ。

不思議と 動物を殺した という罪悪感は無かった。元居た場所で蚊や蟻を殺すような感覚。

こちらの知識や常識が刷り込まれたせいなのかは分からないけれど、今回のように襲われたりした時に躊躇がなくなるのは良い事かな。と前向きに考えることにした。

もう一頭、動かずに残っていた狼は飛び掛ってきた狼が殺されると一目散に逃げていった。

「……はあ」

狼が逃げ去った後、僕は自然と溜息をついていた。

ここに来てすぐに、あんな化け物と戦うことになるとは思ってなかった。

……まあ、自分の体がどれほど人外の力を持っているのか確認できたから、まだいいか。

問題はこの体だ。

始めから手足が無いことに始まり、突然の激痛、無かった手足の再生。極め付けは10歳程度の少女の肉体であるということだ。

もう、自身の身体になにが起こっているか全くわからない。

そもそも、始めから訳の分からないことばかりだったが……。

……はあ。考えてもわからないものは仕方が無い。

とりあえず、この森を抜けることが先決だ。自分の体のことは抜けた後で考えよう。

そう心に決め、一歩踏み出そうとした瞬間 視界が揺らいだ。

そのまま平衡感覚が無くなりその場に倒れる。

最近よく意識が無くなるなあ……なんて、ほとんど危機感をもたず、心の中でばやきながら僕の意識は無くなった。

第三話 精神世界

「……お兄ちゃん誰？」

唐突に、憎しみで黒く染まったこの空間に少女の声が響く。それと同時に、この空間がより一層黒く染まる。

気を抜けば、即座に吞まれてしまいそうなほど、この空間は憎しみで黒く染まっていた。

声の主は姿を見せないが、この現象は声の主である少女がこの空間の主であることを証明するには十分だった。

「名前を聞くなら、先に名前を名乗るかせめて姿を見せたらどう？」

少しでも自分を強く保つための、ちょっとした反抗。

気を抜けばすぐに、ここの憎しみに侵食される。

「私の中に突然、無断で土足で踏み入るような人には言われたくない」

確かに、そう言われればそうだ。ここの空間の主は（恐らく）少女だろう。僕には彼女に招待された記憶も無ければ、彼女にあった記憶もない。そもそも、なぜこんな所に居るのかさえ分からない。

とりあえず彼女が先に名乗るつもりが無いのなら、こちらから名乗るしかない。

「じゃあ僕から……。僕は栗原珪一^{ほしはらけいいち}。きみは？」

自分の名前を言い、彼女の名前を聞く。尤も、これで彼女が答え

てくれるとは限らないが。

「……エリス、エリス・シュバルツ」

ぼつりと、彼女は小さな声で言った。そして、その声とともに小さな それこそ十歳かそれ以下に見える 少女が姿を現した。しかし、出てきた少女は生きているのが不思議なくらいな重傷を負っていた。右手、左足が何かに食い千切られたかのように無くなり、それ以外の部位も、裂傷や擦り傷が酷かった。それでも、少女の声はこの空間にしつかりと響いた。

「お兄ちゃんは どうしてここにいるの？ここは私の精神世界なかだよ？」

その言葉と同時に、この空間の情報が断片的に流れ込んでくる。ただそれは同時に、この世界の憎しみに侵食されているということでもあったが。

精神世界

それは簡潔に言うとならぬ^{入れ物}身体の内側。中身。そうだったものらしい。もちろん、それが肉や骨といった物質的なものではないということとは分かっているだろうが。

そして、ここは絶対不可侵の領域でもある。自分から招き入れるなら話は別だが、外から他者が干渉することは不可能だ。

尤も、1つの身体に二つの魂が宿っている。などという馬鹿げたことがあるならば、それも話が変わってくるが。

ちなみにこの現状が、その馬鹿げたことの一例であることは、断片の中に含まれていた情報で理解した。

情報の中には、目の前の少女があんなボロボロの姿になっている理由や、自分がここにいる理由が入っていた。……どうして自分がここにいる理由まで情報として入ってくるのかは疑問だが、恐らくあのアリスとか言う神が何かしたのだろう。

実際、自分がここにいる理由がそれに関係してくる訳だし。

それよりも、ここに来た経緯が分かっていたのはいいけど一々説明するのが面倒だ。さつき情報の断片が流れ込んできた時のように、あの少女にもこちらの情報を流し込んでやろうと思ったが、残念ながらやり方は分からなかった。

結局、小一時間ほど説明する時間を作ってもらった。

説明している間も、少女はあのボロボロの姿のままなのでこの精神世界で傷ついても死ぬことは無いと、わかっている。あまり心臓によろしくない。

僕が元居た世界のこと、僕が一度死んだこと、神様によって転世したこと。

最後に、僕がここにいる理由。

これについては、はっきり言って神であるアリスの独断で僕には責任は無い。……と思いたい。

なにせ、アリスが死に掛けたった彼女を”偶々”見つけ、その少女の魂と、僕の魂の相性 親和性とでもいうのか が”偶々”ずば抜けて高かったために、彼女を死なせるのは惜しいと判断し僕の魂を彼女の肉体に入れ、肉体の損傷を回復させたのだから。

ある意味、どちらも被害者か。

一通り説明が終わって彼女も納得したようだが、むしろ問題はここからだったりする。

僕が入り込んだことによって、この肉体は所謂、二重人格と呼ばれるものになった。そのために主人格と副人格　普段、表に出ているのはどちらか　を決めるわけだが、これは比較的問題なく決まった。……彼女、エリスが身体をまともに動かせないほど弱っているので、当分は僕、栗原瑠一が表に出ることになった。

問題なのは、これからどう行動するかだ。僕は、元々の体の持ち主がエリスであるということ、エリスに決めてもらおうと思ったのだが、彼女は僕が主人格なのだから僕が決めてしまえばいいと言うのだ。

結局口論になり、妥協された結果とりあえず彼女の要望を今から聞いてそれを目標とするが、普段の生活は僕の自由ということになった。無論、彼女が表に出てこれるようになったら彼女もある程度自由に動くように言ったのだが。

「で、当面の目標は？」

僕が、彼女に要望を聞くと

「……私を捨てた貴族への復讐」

そう低く吐き捨てた。

復讐、ね。

それが善か悪かと言われれば、間違いなく悪だと断言できるだろうけど、今の僕は彼女がこうなった経緯も知っているから何ともい

えない。

個人的には、彼女の要望を聞くと約束したのだから、彼女の言うことは大抵のことは聞くつもりでいた。だから止める事はない。

「わかった。ただその過程で何が起ころうとも文句は言わないでね？」

僕は彼女の要望を承諾し、さらに何が起ころうとも文句は言わないと念を押した。

ゴールは彼女が決めたけど、そこまでの道のりを決めるのは僕。と言うのがさっきの妥協案。

達成したその後のことは考えてないけれど、その時はまたこうやって決めるんだろう。

「うん、わかった。それでいい」

彼女からも承諾してもらい、とりあえずは良い方に纏まった……かな？

うん。まあそれはいいとして……。ここからどうやって出るの？

そのことを彼女に聞くと、時間が経てば勝手に出れるとの返事が返ってきた。彼女の感覚では後10分ほどで時間切れらしい。

「目が覚めても、意識すれば話が出来ると思うから何か分からないことがあったら、いつでも聞いて」

「わかった。ありがとう」

そろそろ時間なのか、意識がなくなってきた。

内心、ここでも意識がなくなるのかと思いつながら、最後にお礼だ

け言えたことにほっとして僕の意識は無くなった。

第三話 精神世界（後書き）

2週間とか言いつつ、1ヶ月掛かってしまいました。
しかもその割りに、量は多くないと言う。すみません。

まだ未熟者なので不自然な表現や誤字、矛盾等があるかと思いが、見かけたら、そっとしておくか、生暖かい視線で見守るか、私に報告してください。

これからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5872y/>

転世 ~ vampire's avenger ~

2011年12月18日09時58分発行